歴史を歩く㉘

『戦国時代の群像 ～第十三話　竹原山の戦い』

廻城―。現在の霧島市福山、国道220号線と国道504号線を結ぶ県道478号線沿いにその城址が残っている。「仁田尾城」とも呼ぶ。牧之原台地から西側の鹿児島湾に突き出した舌状台地に築かれており、西は鹿児島湾、北部と南部は崖という険阻な要害をなしている。

治承4年（1180年）に以仁王とともに平氏追討に立ち上がった源頼政は宇治橋の戦いで平氏に破れ、息子の仲綱、宗綱、兼綱とともに戦死した。この時源仲綱には三人の息子がいたが、幼少のため命は助けられ、流されて廻村を与えられた。以来子孫は「廻」を姓とし廻城を治所として繁栄していた。

永禄4年（1561年）5月5日、肝付兼続はこの廻の地を攻略した。この時の廻城主は第15代廻久元で、島津氏と友好な関係にあった。しかしながら、久元はすでに眼疾を患い、失明していた。さらに子の頼員も幼弱であったため、兼続の襲撃に対抗することもできず、一族ともに城を逃れるしかなかった。

この兼続の行動は、島津本家に大きな衝撃を与えた。島津氏にとって廻の地は、大隅への北の玄関口としての要所だったからである。廻における事変を知った島津貴久はすぐに城の奪還のために動いた。同年6月23日、貴久は子の義久と、貴久の弟で相州島津家4代目である島津忠将とともに大軍を率いて廻に向かった。貴久と義久は大塚（現在の霧島市福山町惣陣平）に本陣を布き、忠将は馬立（現在の霧島市福山町南園）に陣を構えた。さらにこの2箇所の陣の中間地点の竹原山に遊軍を置いた。

一方肝付兼続も嫡子の良兼ら4人の息子を廻城に集結させ、さらに大崎地頭 伊集院竹友をはじめ松山・志布志・串良・恒吉などの肝付支配下にある地頭にも兵を率いて廻城に集めさせた。また垂水城主 伊地知重興、禰寝院の禰寝重長とも手を結び、両氏の兵力も含めて城を固めた。かくして島津氏と肝付氏双方、主力を尽くして廻城の攻守に臨んだのである。

7月12日に肝付兼続が攻撃を仕掛けた。廻城から竹原山にいる島津軍へ向けて攻め込んだのである。谷を隔てて布陣している大塚本陣は救援に向かうことができなかった。馬立に布陣している島津忠将はこれを知り、竹原山の窮地を救うため、自ら兵を率いて竹原山へ向かった。しかし馬立の陣に対して背後の海から、あるいは廻城からの攻撃も予想されるため、全ての兵で救援に向かうことはできず、結局忠将率いる救援部隊はわずか70名程であったという。この時、家老の町田忠林は敵の策略である可能性を疑い、忠将をしきりに引き止めた。しかし、忠将は、竹原山の危機を見過ごすことはできなかった。忠将もまた、兄貴久に引けを取らない猛将であった。この時まで負け知らずの忠将は、少ない兵力でも、きっと竹原山を救うことができると信じていた。

忠林の悪い予感は的中した。忠将隊は竹原山の陣に向かう途中で肝付軍の伏兵に取り囲まれてしまったのである。忠将らは前後左右から襲い掛かる敵に対して奮闘し、多数の肝付方の兵を切り倒した。しかし、ついに力尽き、島津方の救援が来るまでには忠将・忠林以下隊のほとんどの兵が討死していたという。島津忠将 享年42歳であった。

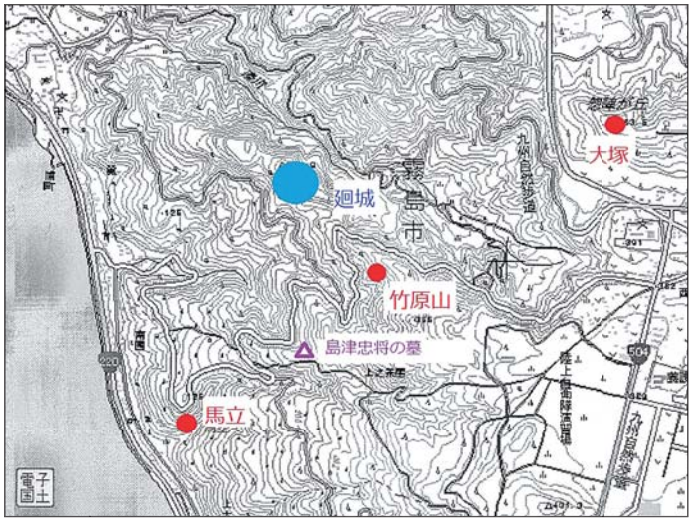
島津忠将の戦死を知った島津貴久・義久は悲しみ、そして憤怒した。義久は叔父の仇を討つため、すぐさま廻城への反撃を始めようとする。しかし義久の弟である歳久に止められた。歳久は竹原山の戦いで受けた島津軍のダメージは大きく、混乱した状態で怒り任せに反撃を仕掛けるのは賢明ではないと判断したのである。

結局、永禄4年の島津氏による廻城奪還は実質失敗に終わり、島津軍は、悔しさを胸に鹿児島へと兵を引き上げた。

その頃、義弟島津忠将を討ち取った肝付兼続は、妻阿南に離縁を申し出た。妻の実家である島津本家との決戦が確実となった今、これ以上妻を苦しめることは耐えられなかったのだろう。

しかし、阿南は決して兼続の申し出を受け入れなかった。阿南もまた、父・兄弟と決別し、肝付家と運命をともにすることを心に決めていたのである。

（大崎町教育委員会　内村憲和）



◀廻城周辺の地図（霧島市福山町）